

鳥窠禪師と道元禪師

——『正法眼藏』『諸惡莫作』巻の課題をめぐって——

岩 永 正 晴

筆者の当面の課題については拙稿「善悪考——『永平広録』上堂の用例——」（『宗学研究』三七 一九九五、三）、及び「善悪考（その二）——『正法眼藏』『諸惡莫作』巻の検討——」（『曹洞宗研究員研究紀要』二六 一九九五秋刊行予定）をご参照頂きたい。

本稿では『正法眼藏』『諸惡莫作』巻を読む上で派生した問題について述べる。該巻では鳥窠道林と白居易との問答がいわば経証の如く引かれるが、出典となった『景德伝燈録』描く所の鳥窠禪師道林像と該巻でのそれとの相違は何を意味するか、この点について考えた所を述べ、「諸惡莫作」巻が担う課題について触れる。

『伝燈録』で道林は牛頭下径山道欽の法嗣とされる（T.51. 230b）。『伝燈録』における道林伝の成立については太田次男氏「白居易と道林禪師の問答について」（『成田山仏教研究紀要』一四）に詳しく、『宋高僧伝』所収「唐杭州秦望山円脩伝」

（T.50. 774c）、及び『祖堂集』『道林章』（禅学叢書本P24）を受け、更に独自の機縁などを取り込みながら成立していることが明らかにされている。詳細はそちらに譲るが、想像するに『伝燈録』は『宋高僧伝』が百丈懐海の法嗣とする「円脩伝」の文章を用いながら、自ら収集した秦望山の鳥窠禪師についての伝説は南宗馬祖下の祖師に相応しくないと判断し、『祖堂集』に従って第三の宗たる「空宗」としての牛頭宗径山道欽の法嗣として収録した、といったところか。

さて、『伝燈録』の道林章でまず注目されるのが、西明寺の復礼法師（伝は『宋高僧伝』T.50. 812c-3a 所収）に師事して『華嚴経』『起信論』を学び、また復礼に『真妄頌』（円宗文類』Z103. 419d 他参照）を示され、禅那を修したとされること。その際道林が「初めにどのように観じ、どのように心をはたらかせるのか」と質問したとき復礼はずっと無言であったが、道林は三度揮してその下を去り、その後径山道欽と出

会い、正法を得たとする。この下りの意味するところは何か。

道欽の下を辞し南に帰り、永福寺での法会に赴いた道林は、靈隠寺の韜光法師(伝不詳)に「この法会ではどうして人々が話しているのか」と質問され、「声がしないなら、誰がこの法会のことを知りえようか」と答えたことあり、また、道林の法嗣とされる布毛侍者会通の伝(『伝燈録』[51. 230c)をみると、会通の出家の志を、僧となってもひたむきに修行するものが少なく、修行自体も疎かにされていることを理由に断った時、会通に「本来の清浄さは琢磨によるものではないし、本来の明るさも他に照らされるから(馬祖の語に依るか。禅文化研究所『馬祖の語録』一九八頁参照、という訳ではないでしょう」といわれ、「君がもし『淨智は妙円にして、体は自ずから空寂なり(達磨の語によるか。『伝燈録』[二「達磨章」[51. 219a)』ということを了しているなら、本当の出家である、どうして上辺の出家の姿が必要なのか:」と述べ、それに対して会通は「理としてはその通りではあっても、事の上ではどんな利益がありましょうか:」と答えたところある。道林は『起信論』を学んだとされていて、韜光との因縁は心真如門における所謂離言真如と依言真如、会通との問答は心生滅門の本覺と不覺・始覺といった説を踏まえるようで、全体として『起信論』の教理を下敷きにしたがら、始覺門の修行を重んじる

道林の姿が組立てられている。従って復礼に示された言説を離れた真如のありようを背い、更に道欽の下で始覺門の修行を学び正法を得たという道林像が窺える。

また、道林と白居易との問答をみると「私は鎮江山に地位を得ています。何の危険がありません」という居易に対して道林は「薪が盛んに燃えているように、君の迷いの根本は止んでいない」と述べ、以下所謂「諸悪莫作」話が続く。白居易は『伝燈録』では馬祖下の仏光如滿に参じて心法を得たことになっており(『51. 279c-80a)、馬祖下の禪に『いての理解があったことが前提とされていて、居易の発言もそこによって来しよう。これは会通の場合と共通する。対する道林は「識性不停」或いは「諸悪莫作、衆善奉行」と答えており、自己の当体をそのまま真如と見ようとする居易に対し、道林は心生滅門に立つて不覺と始覺の義を示し修行の必要を強調したものの、と解釈できる。

次に「諸悪莫作」巻(以下春秋社『道元禪師全集』一に依り、頁数のみ記す)で示される道林像を確認する。該巻については筆者の理解は既述拙稿をご参照頂きたい。この巻の眼目は、修証一等の上に更に修証を開き、修行に一切を取めるといふ修証観を提示し、修行の功德及び必要性を明らかにする所にある。この修証観は、因果に関わる具体的な諸法が、そ

の性としては「無生・無漏・実相」であるという諸法の捉え方に由来しており、その把握は派生論的な思考・「還源返本」的思想とは無縁であった。『伝燈録』で道林に託された修証観は、修行の必要を説く点では禅師のそれと一致するが、両者の構造は基本的に異なる。しかし該巻で道林を否定する表現は見えない。両道林像の距離が問題となる。

そこで本文を見てみると「居易おもはくは、道林ひとへに有心の趣向を認じて、諸悪をつくることなかれ、衆善奉行すべし、といふならんとおもひて、仏道に千古万古の諸悪莫作、衆善奉行の互古互今なる道理、しらず、きかずして、仏法のところをふまず、仏法のちからなきがゆえに、しかのごとくいふなり」(三五〇頁)とあり、居易は道林が「有心の趣向」を肯定していると考えているが、居易は仏道における千古万古・互古互今の「諸悪莫作・衆善奉行」という道理を述べようとする道林の真意を知らない、という。ところで禅師は『伝燈録』を踏まえて「唐の白居易は、仏光如滿禅師の俗弟子なり。江西大寂禅師の孫子なり」(三四九頁)と記す。その居易が道林の修行を「有心の趣向」と判じて否定するのは、例えば馬祖の「道は修するを用いず、但だ染汚すること莫れ。何をか染汚と為す。但し生死の心有りて、造作し趣向せば、皆な是れ染汚と為す」(前出『馬祖の語録』三三二頁)との言葉に照らせば理解できる。この居易を禅師は認めない。禅

師は「おほよそ仏法は、知識のほとりにしてはじめてきくと、究竟の果上もひとしきなり。これを頭正尾正といふ。妙因妙果といひ、仏因仏果といふ。仏道の因果は、異熟・等流等の論にあらざれば、仏因にあらざらず、仏果を感得すべからず。道林、この道理を道取するがゆえに、仏法あるなり」(三五〇頁)と述べ、道林を禅師の修証観の範囲にまで引き入れ『伝燈録』の道林像を否定する。結論を言えば『伝燈録』の道林を、修行の必要性の強調という一点を軸に、禅師の修証観を踏まえた人物へと転換させ、『伝燈録』が道林と白居易とに担せていた修証観を共に超克している、ということになる。

以上『伝燈録』と「諸悪莫作」巻とで描かれる道林像の相違から、禅師がご自身の修証観を提示する為には、本覚的修証観と始覚的修証観、その両者との対決を避けては通れなかったことを見てきた。ここに該巻選述の大きな課題があったと思われる。なお本稿は駒沢大学石井修道氏のご研究、特に『宋代禅宗史の研究』に大いに示唆を受けたことを記して結びとする。

〈キーワード〉 道元、鳥窠道林、「諸悪莫作」

(曹洞宗宗学研究所所員)